



134号

2008/6/1

日中文化交流市民サークル「わんりい」
東京都町田市能ヶ谷町1521-58 田井方
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>
Eメール:wanli@jcom.home.ne.jp

四川大地震・犠牲者の方々を哀悼し、四川の復興を願っています



開校式の集会に参加の少女 2005年11月 ネパール ルンビニ・ワズワニ村 加藤誠一(ネパール・ミカの会)
ミカの会の建設の学校で(右手/高校、後/中学)、お土産のノート、鉛筆を抱えて嬉しそうな子供たち。

「わんりい」134号の主な目次

四川大地震・四姑娘山登山基地からの報告……………2
 北京雑感その(25)「北京の工事現場」……………5
 私の調べた四字熟語(23)「空前絶後」……………6
 松本杏花さんの俳句集・「余情残心」より……………6
 すてきな切り紙おばあさん・高鳳蓮(3)……………7
 媛媛讲故事(4)「燧人氏取火」(燧人氏、火を取る)……………9
 スリランカ紹介(19)「真珠採り」……………10
 私の四川省一人旅(番外編)汶川・百花でI……………11
 チベット旅行記「チベット仏教と天空列車」……………13
 大連だより・日本語教師雑記(7)……………15
 中国を読む(52)「もの食う人々」……………16
 「わんりい」掲示板……………17

♪♪「中国語で歌おう!会」・6月の歌 ♪♪

「香港之夜」(テレサ・テンの人気ナンバー)
(歌詞 P16)

於:まちなだ中央公民館 7F・第一音楽室

JR 横浜線町田駅八王子寄り改札口徒歩2分、小田急線南口徒歩5分
町田東急裏109 ファッションビル 7F

6月13日(金) 19:00 ~ 20:30

指導:趙鳳英 (中国人歌手)

ご参加の方は録音機をお持ち下さい

●「中国で歌おう!会」 於:まちなだ中央公民館
毎月1回、主として第3金曜日開催(変更あります)

19:00 ~ 20:30 会費(月1回):1,500円

*体験無料

*初めてご参加の方は、会場、日時など「わんりい」事務局へお問合せ下さい。



四川大地震・四姑娘山登山基地からの報告

今月は緊急地震レポートをお届けします。わりりに「四姑娘山写真だより」をお寄せくださっている大川健三さんが四川省大地震発生直後の、四姑娘山山麓にある町・日隆の状況をお知らせ下さいました。日隆は、今回の地震震源地の西60kmにあります。

地震発生時、私がいた日隆では、今だに停電が続きE-mailを使えません。雨が上がって道路の落石が治まった昨日(5月15日)、日隆から西方50km下流にある小金の町に出て本稿を送ります。

1. 震源地との位置関係

テレビ、新聞などのニュースでご存知のように、5月12日14:30過ぎ、汶川県南部を震源地にして大きな地震が起き、震源地周辺は強い揺れによる建物崩壊と山崩れで全滅状態になりました。また岷江流域で震源地南側の都江堰市や北側の北川地方等でも大きな被害が出ました。この状況についてはこれまでのニュースで詳しく報じられています。筆者の居住地「日隆」から東側60kmという、比較的近い場所での状況報告です。

2. 日隆とその付近の状況

日隆から小金へ行く途中30km位の場所で地盤が弱い急な崖が続いて、この周辺で落石や崖崩れが集中して起きました。地震が起きた時、折り悪く私は小型バンに乗ってこの場所を通過して子供の頭位の大きさの落石の一つに直撃されましたが、運良く助手席の窓とその後ろの窓の間のフ

レームに当り怪我せずに済みました。しかしこの時、近辺で2人の村人が落石のために亡くなったそうで、他の場所でも落石による死傷者が少し出たそうです。

四姑娘山登山・トレッキングのベース基地として知られている日隆は岷江西側の分水嶺で隔てられた震源地の西側60km位に位置しています。四姑娘山を挟んで震源地と隣接しているため地震時には大きな揺れが有り、石積み民家が半壊したり壁や石垣が崩れました。しかし、幸いなことに死傷者は出ませんでした。

また四姑娘山自然保護地区内の長坪溝や双橋溝(溝=溪谷)の奥では氷河が崩れ雪崩や岩崩れが起き、川沿いや山の斜面では所々で小規模な地割れも起きました。しかし、同保護地区内の海子溝や長坪溝の本道では大きな被害はありませんでした。一方、枝谷では岩崩れで道が塞がったり唐松林が岩崩れでなぎ倒されたりしています。地震の後、日隆では雨が



壊れた家の傍に建てられた小屋。



地震が起きた翌朝、避難したテント場で不安な表情を見せる村人達。



テレビを外へ持ち出し自家用発電機に繋いでニュースに見入る村人達。

降ったり止んだりしてさらに地盤が緩み、時々大きな岩が落ちて来て谷間にこたましていました。地震から3日後の15日になってやっと晴れると落石は治まりました。

日隆の発電所は地震で壊れ、修理には膨大な費用を要するため復旧に日数が掛かるそうです。併せて臥龍經由で供給されていた汶川県の電力も、区間の被害が深刻な様子で絶たれているため、電話は半日位しか通じず、長期間電気の無い生活が強いらるかも知れません。



学校が休みになり後片付けを手伝う子供達。



命が助かったので壊れた家の前で比較的明るい表情を見せる父娘と従姉妹達。

当地の歴史書に拠ると、日隆では18世紀中期の金川戦役以後100数年ぶりの大きな地震で誰も経験した事が無く、



2階部分の損傷が多い。



日月山荘でストーブや厨房が有った棟(日月山荘は、'わんりい'メンバーたちが四姑娘山登山で世話になった。他の棟は無事)

多くの村人が強い恐怖を感じています。

3. 四姑娘山山麓の長坪村

半壊したり壁や石垣が崩れた民家の被害は地盤が弱い、四姑娘山麓の長坪村に集中しています。ほとんどが2階部分の崩壊で、昔ながらの建築方法に弱さの原因が有るようです。つまり、1階は壁厚60cm位で丁寧に石を積みますが、2階は厚さが減り、石の積み方が雑になる傾向が有ります。さらに石を泥と小石で固めながら積んでいるため、大きく揺れた時に家の四隅に集中する応力に耐えられないようです。現在の四姑娘山の民家の建築基準では、外壁を石積みにする事に決められており、耐震力のある鉄筋コンクリートを使用した建築をしにくい事情があります。この建築基準を見直す必要が有りそうです。

余震が頻発している為、日隆、特に長坪村の人々は壊れた家の整理もままならず、家の外でのテント生活を続けています。村の人は命が助かった事を喜び表情は比較的明るいですが、その一方で家を修理するための資金をどうするか困惑しており、政府の援助を待っています。

成都から四姑娘山山麓に続く道路は各所で崩壊し、不通でしたが落石などを取り除くなど早急に整備され、バスの運行も予定されています。しかし、パンダ繁殖育成基地のある臥龍から日隆を結ぶ峠越え区間の道路はまだ不通です。

四姑娘山付近の村人が本気で心配している事は、今回の地震のために観光客が2～3年来なくなり、10年前の貧しい生活に戻るのではないかと事です。村人は今年も多くの人が四姑娘山を訪れてくれるよう願っています。

●四川大地震・支援コンサート開催いたします

7月24日(木) 時間 19:00 ~

於：町田市民フォーラム・3Fホール

詳細は、(17)ページをご覧ください。

四川大地震・四姑娘山登山基地からの報告 II

成都から四姑娘山登山基地・日隆にいたる道は、丹巴ルートに続いて夾金山ルートも通れるようになり、バスも走るようになりました。但し、バスのチケットは窓口では販売されておらず運転手から直接買います。

また、政府から食料や衣類が援助されるようになりました。また、汶川県からの電力は絶たれたままですが、5月25日現在、発電所は修理されて電気が供給されるようになりました。また、電話もほぼ一日中繋がるようになりました。

一方で、日隆・長坪村では70%位の民家が半壊したり壁や石垣が崩れ^{*}、現在、テントでの避難生活を続けています。震度の大きな余震が続いていますのでテントでの避難生活が長期化する可能性があります。壊れた家から持ち出した生活用品も増えてテントが手狭になりました。テントの不足が問題になってきています。

なお、余震が収束した後、壊れた家を修復することになりますが、観光客の激減により村の収入が減り、10年前の水準に戻ることが予想されます。修復

資金の調達には村人にとって大きな負担であり、深刻な経済的問題になると思われます。

余震の震度はよく判りませんが、地震慣れした日本人の私でも、壁や屋根の一部が壊れた下宿先の家(1階の真ん中に有る私の部屋は大丈夫ですが)から飛び出したくなるほどの余震が数日に一度くらい有り、その他の体感余震はほぼ毎日数回有ります。

食料・水などは足りています。小学校は未だ休校しています。

日隆鎮における程度の被害は他の村にも出ていますが、特に地盤が弱い長坪村では民家の70%(昔ながらの工法で建てた石積みの民家の殆ど)が半壊したり壁や石垣が崩れるなどの大きな被害を受けました。

^{*}泥と小石で固めながら石を積む、昔ながらの建築方法の家のほとんどが半壊したり壁や石垣が崩れました。鉄筋コンクリートやコンクリートと小石で固めながら石を積んだ建築方法の家では被害はほとんどありませんでした。

震源60キロに日本人写真家 落石が車直撃、危機一髪

【成都18日共同】中国・四川大地震の震源地から西約60キロ、高山植物の名所として知られる四姑娘山近くで、震災を体験した日本人がいることが18日、分かった。写真家大川健三さん(58)で、仕事先に向かう車を落石が直撃したが、無傷だった。共同通信の電話取材に応じた。

大川さんは同山のふもと、四川省小金県日隆在住。地元の自然保護区管理局の顧問として動植物や風景を撮影し記録する仕事をしている。

12日の地震当日、山すそを車で移動中だった。「急斜面から子どもの頭ぐらいの石がごろごろと落ちてきた。揺れに気付かず、何が何だか分からなかった」

「ガッ」。落石が車に当たったが、助手席の窓と車体フレームだったので、けがはなかった。落石を避けるため車を止め、生い茂った木の中に逃げ込み、振り向くと大規模な土砂崩れでもうもうとした土煙。初めて「怖い」と感じた。現在は、震源地から西に約150キロの丹巴に避難中だ。

2008/05/18 17:57 【共同通信】



家屋からテレビを運び出し、地震報道を見る住民ら=14日、四川省小金県日隆(写真家の大川健三さん撮影・共同)

大川さん被災の記事は「共同通信」の配信で日本各地の地方紙が報じました。



2000年以来、北京での土木・建設工事現場を眺める機会があって、日本と北京では、工事に対する考え方が随分違うと感じ、初めて現場を目にした時は、本当に、「目が点になる」ような驚きを覚えました。21世紀に入ってから中国各方面の進歩は著しいので、今は違うかも知れませんが、ちょっと旧聞となる、私の体験をお話します。

2000年頃、大学内のメールアドレスを取得するために、大学本部へ出かけました、建物は約100年前の大学創立当時に、ソ連の技術者の協力で建てられたそうで、堂々としていましたが、内部は薄暗くて、工事をしているようでした。受付で話を聞くと、事務は中で行っていると分かったので、工事現場を通過して事務室まで行きました。その工事は、壁の塗り替えとか、電気の配線工事とかではなく、廊下の床を掘り返し、天井や壁を打ち抜き、階段を新設するような大工事、足元には工事現場独特の、幅30センチ足らずの板が渡してあり、来客も薄暗い中を足元と頭上を気にしながら、その板を歩いて事務室まで行くのでした。

こんな工事の中、事務所は騒音がひどいだろうと思ったのですが、建物が頑丈に出来ているせいか、部屋の中に入ると音は殆ど気になりませんでした。それにしても、日本だったら、このような状態で事務は執らないし、工事も行わないでしょう。事務職員の出入りは不便だし、第一工事が捗らないし、安全が保てないと思うのですが、中国では建物を閉鎖するという考えはないようです。覚束ない足取りで板の上を歩いていたら、工事をしている職人さんが、「小心点儿！」と声を掛けてくれただけでした。

また、四環北路が出来て間もなく、その道を歩いていると、歩道に縦横2メートル、深さ1メートル程の四角い穴がありました。見ると、歩道の車道側に等間隔で開いています。どうやら街路樹や街灯の為のスペースのようです。ところがこの穴に、何の目印も無いのです。穴の淵まで綺麗に舗装されていて、遠目にはそこに穴があることは分かりません。近くへ来て初めて、「あ、穴だ」と気が付きます。昼間歩いている分には、空を見上げて歩かない限り支障はなさそうですが、自転車に乗っている、気が付かないで自転車ごと落ちてしまいそうです。まだ街灯が設置されていないので、夜間は危険です。工事中のサインとか、せめて赤い旗をつけた竹竿でも立ってれば気を付けるでしょうが、この現場には、何も目印がありませんでした。広い、出来たての歩道が続い

ているので、地域に不案内な人が自転車でやって来て、スピードを上げて走ったら危険です。特に、目の不自由な方にとってはとても危険だと感じました。

北京では、目の不自由な方々に対する配慮がまだまだ足りないと思います。最近補修された道路には、点字ブロックが埋められるようになりましたが、この点字ブロック、設置の趣旨が分かっていないのではないかと思います。ある時、50センチ足らずの細い歩道に設置されていたのを辿っていくと、電信柱にぶつかってしまいました。道が細いので一旦車道に下りなければ通れません。そんな指示は何も無くて、電信柱の向こう側から、突然また点字ブロックが続いていました。明らかに、この表示が必要な方々のことは考えていないで、「決まりがあるから設置した」と言わんばかりの工事でした。尤も、日本でも、折角設置しても、ブロックの上に自転車や商品を置いて、安全な使用が出来なかつたりしますから、大きなことは言えませんが。

もう一つ、北京の街角でよく見かける工事は、歩道の修復です。ご存知のように、北京の歩道はコンクリートブロックや煉瓦を敷き詰めてあるところが多いのですが、このブロックに沈んだところがあって、地面が凸凹しているのをよく見かけます。折角綺麗に仕上がったのに、一度雨が降ると、もうグラグラして、すぐ沈み始めます。

ある時、家の近くのバス停付近で、歩道の工事をしていました。通行が制限される訳でもなく、人々が普段通りに歩いたり、バスを待ったりしている所で、作業が始まりました。ブロックの下は、砂を含んだ土で、一応平らに均されているのですが、人々が勝手に歩くので、かなり凸凹して来ます。それでも作業は構わずに続けられます。日本だったら、必ず、バス停を移動させたり、作業地点にロープを張ったり、柵を設けたりして立ち入り禁止にして作業をすると思います。

バス停付近での仕事を、バスを待ちながら見ていましたが、作業員は素人が多いようで、下地が平らでなくてもブロックを並べ、高低の差がついた所では、周りの土をかき集めて下に宛がい、その場で高さが揃えばそれでよしとしてそのまま次に移ります。これでは、完成した時は平坦で美しくても、一度雨が降ると、すぐ凸凹になるはずで

皆が皆こんな作業をしているわけではないのでしょうが、こんなことが多いでしょう。北京の凸凹歩道の秘密が分かったような気がしました。

後にも先にも無いことが起きたときに、私たちはよく「空前絶後」を使って表現します。

卑近な例をあげますと、今回のミャンマーのサイクロンによる被害状況は、サイクロンによるものとしては正に“空前絶後”なのではないでしょうか。今回はこの四字熟語の謂れを調べてみました。

まず辞書から調べて見ますと、三省堂現代国語辞典には「今までも例がなく、これからも例がないと思われる、とほうもないこと。」

小学館 中日辞典には「空前絶後 非常に大きな成果や盛況であることの形容に用いることが多い。」と載っています。

日本と中国、文字は同じですが、形容

する内容に相違があるようです。

この成語の出自は「宣和画譜」注の「顧冠于前，张绝于后，而道子乃兼有之」(顧は前に冠たり、張は後を絶つ、而して道子は兼ねて之を有す)の部分です。

晋代の顧愷之は絵を画く才能が拔群であることで、有名でありました。彼の画の中の人物の形は生きて動いているようで、その素振りは真に迫っていました。ありふれた画き方でないのは、彼が人物を描く時にはいつも眼を一番最後に描くのです。ある人がどうしてそのようにするのかと、その理由を尋ねたところ、彼は「人物画が真に迫るものになるかどうかは、眼を描く正にその時に決まるのじゃ。」と言いました。ずばりと大事な秘密を打ち明けたので、人々は彼に敬服しました。

その当時の人たちは、彼を三絶と呼びました。ここで三絶とは才絶(比べるもののない才能)、画絶(比べるもののない画)、痴絶(比べるもののない熱心さ)を言います。

南北朝の梁朝の時に、張僧繇という著名な画家がおりました。彼は山水画、人物の仏像画に長じていました。その当時梁武帝は沢山の寺院や仏塔を建立し、それらの建物の画は皆 張僧繇に描かせました。伝えられている話では、彼は嘗て寺院の壁に四匹の龍を描きましたが、その際に眼だけは画き入れませんでした。そこで、周りの人がその理由を問うと、「眼を画くとこれらの龍は壁を破って飛び出してしまうかもしれないからじゃよ。」と言ったそうです。ところが誰も信じないので、二匹の龍に眼を画き入れると龍は直ちに壁を破って飛び出していました。画を画く技術のずばぬけていることが示されたのです。

唐代の吳道子は絵を画くことも書道も一人で両方できる大画家でした。彼の山水画と仏像画は天下に名を馳せていました。彼が景玄寺で描いた地獄变相図は、幽霊や妖怪を画かなくても、薄暗く気味が悪く怖かったので、多くの人はその絵を見てからは、自らを悔い改め悪行を捨てて、善行をするようになったと言われていました。後の人はこの三人の画家を評価して、「顧愷之の画は、前

人を越えることを成し遂げ(空前)、張僧繇の画は後の人が誰も追いつけないことを成し遂げ(絶後)、吳道子の画は二人の長所を兼ね備えている。」と言いました。

ところで、空前絶後と似たような表現に、「未曾有」、「前代見聞」、「空前」がありますが、因みにこれらの意味をもう一度三省堂の国語辞典で見ますと、「未曾有」は「今までに一度も起こったことのないこと。」「前代見聞」は「今まで聞いたことがないような珍しいこと。」

「空前」は「今までに、そのような例がないこと。」

と、ありました。これから「後にも先にも例がない」という“空前絶後”がもっとも大変な事態を表現していることが分かります。

注記 宣和画譜：宋代に編纂された、画家の伝記。

松本杏花さんの俳句

よじょうざんしん
「余情残心」より

麦の穂の出揃いにけり高架駅

lǒng lǒng xiǎomài huáng
垄垄小麦黄
kèkè chōusui lù róng máng
棵棵抽穗露绒芒
gāojià chēzhàn páng
高架车站旁

季语：麦穗 夏

赏析：就在麦子全都抽穗的田边，建好了一座高架车站。轻轨电车通到田头，本是件值得庆贺的事，但这眼看就成熟的麦子极有可能受坝，却令人感到惋惜！

“要致富，先修路”是我国家上世纪80年代的口头禅，看来人类发展总是伴随着生态环境发生变异的。

鉄塔の影伸び伸びと植田風

tiě dā hé gāosōng
铁搭何高耸
liúchōng qūgān zhǎn qīngyīng
流畅躯干展倩影
yángtián lüè qīngfēng
秧田掠清风

季语：秧田，夏。

赏析：与以上两首俳句一样，本句也是以现代化建设为主题。不过，此句倒给人一种和谐之感，大概是吹来的清风，调和了铁搭与秧田的视觉冲突吧！毋庸置疑，这流动的风拂去了二者静对的尴尬。作者运用手中的生花妙笔，描绘出了现代化建设与大自然环境的和谐之美，真是难能可贵！

すてきな切り紙おばあさん・高鳳蓮

周路 著 李晴 訳

第3回 高鳳蓮さんのこれまでの道のり

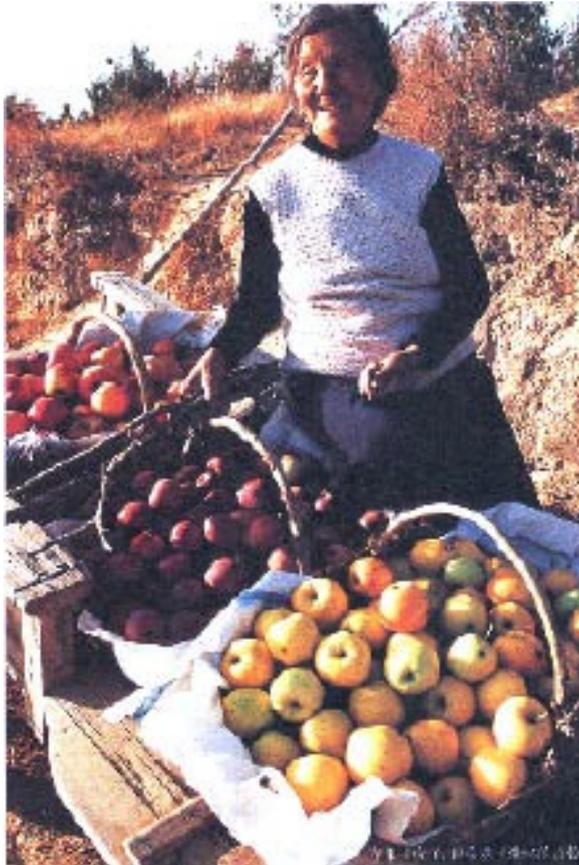
高鳳蓮さんは1935年に延川県の北東の村で生まれました。祖父やその兄弟は清朝の役人を務めていたので、裕福で教養があり、この地域では最大の有力な一族として羽振りを利かせていました。

しかし、彼女が生まれた年に中央紅軍が万里の長征の果てに延安にたどり着き、時局はすっかり変わってしまいました。裕福で知識階級である高家は革命を経て、すっかり土地や財産をなくし、没落をしてしまいました。革命後、世の中の思想は変わり、女性が字を知り、本を読む機会が増えたにもかかわらず、高家では依然として昔のままの掟が守られていました。「女は才能が無いことこそ即ち徳」なのです。女の子はしっかりと儒教の教えを守り、窯洞の中で針仕事や剪纸、機織を習い、後々の家事のやりくりや子供を育てる日々に備えるのです。幼いときから利発だった高鳳蓮さんはすぐに家事のコツを飲み込み、手早くやってのけました。そして余った時間は鋏を持って、布や紙を手にとると豚や猫や鳥など、なんでも身近にあるものの形を切っていました。時には草や木の葉さえも剪纸の材料にするほど夢中になっていました。

そんな少女時代の一つのエピソードがあります。ある日、高鳳蓮さんは脱穀の手伝いをしているうちに、いつのまにか木の下に蹲り剪纸に夢中になっていました。その時大きな灰色の狼がそっと忍び寄ってきたのです。幸い、少し離れたところにいた叔父さんが大声を出し、危うく難を逃れることが出来ました。そんな娘を見かね、お父さんは木の枝と枝の間に石板を渡し、以来高鳳蓮さんはその上に座ってこころゆくまで紙を剪ったり、脱穀の作業を見守ったりしたそうです。

自分の心のままに過ごした子供時代は終わり、やがて結婚をする年頃となりました。父親の取り決めた相手は

伯母の11番目の子供でした。伯母の家は水がなく、畑の少ない村にあり、大層貧しく、おまけに愛情すらありません。そんなところへ嫁に行くことはわざわざ苦勞を背負い込むだけだということは明らかでした。初めのうち母親はこの縁談に反対をしていますが、面子ばかり重んじる父親の考えを変えることは出来ませんでした。



収穫を喜ぶ

人生でもっとも大きな喜びの一つである結婚の日は高鳳蓮さんにとって忘れることの出来ない惨めで貧乏くさいものとなりました。花嫁が婚家先に向かうときには籠にのりますが、夫の家にはお金が無く、今にも壊れてばらばらになりそうな骨組みだけの籠に乗らされました。

婚家に着き、新婚の部屋へと入ると、オンドルの上には毛織りの敷物が広げられ、部屋の隅には穀物の入った二つの入れ物、籠の横には大きな水がめがあるだけでした。しかも後日判った事ですが、夫の家の財産といえば水がめだけで、毛織りの敷物は大伯父から借り、穀物の入った入れ物も親戚の家から借り、どうにか面子を持ちこたえさせたのでした。その夜、夫は伝統に従って挨拶をした高鳳蓮さん

に対して一言も口を聞かず、二人は服を着たまま夜を過ごしたのでした。

夫は白鳳楽と言ひ、3歳年上の善良で真面目な人柄です。ただ、気の弱い性格で、普段はとても寡黙で、ひたすら畑仕事と家畜の世話に精を出しています。これに対し、高鳳蓮さんの性格は正反対で、一本気で、てきぱきと働き、何事にも勝気です。そして、何をやるにも一番を目指します。嫁いで以来、家の全てのことを取り仕切り、すっかり高鳳蓮さんが家の大黒柱となりました。

ある年、国の政策上の失敗^{*注}と天候の不順で農作物の出来が悪いときがありました。高鳳蓮さんの家には育ち

盛りの子供が多く、春になる前に食料がなくなっていました。高鳳蓮さんは一家の生活を支えるために隣近所に食料を借り歩きました。何度も借りているうちに最早これ以上は頼むことが出来なくなり、とうとう外へ物乞いに出かけました。人が飢え死にしそうなとき、面子にこだわる必要があるでしょうか。

幸い高鳳蓮さんには人との縁がありました。周りの村々は高さんの家の暮らしぶりを良く知っていたので、物乞いに出るたびに張家からは一碗、李家からは一升というように食料を貰うことが出来、何日かをどうにか凌ぐことが出来ました。しかし、いつまでも物乞いを続けるわけにも行きません。当時夫は労役に借り出され、他所で働いていました。家には空腹で動くことが出来ない年寄りと餓えて泣き叫ぶ幼い6人の子供がいます。しかたなく村の男と一緒に黄河を渡って山西省へ玉蜀黍を仕入れに行ったり、となりの県に役畜を横流ししにいたり、と随分危ない橋を渡ったのです。

山西省で仕入れた玉蜀黍は陝西省では2倍の値段で売れました。高鳳蓮さんは1袋50キロもある玉蜀黍を10袋ほども背負って道を上り下りし、春になって流れ始めた氷塊を避けながら黄河を小船で横切り、それこそ命がけで運びました。やがて両省での値段の差が無くなってしまうと、次に高鳳蓮さんは家畜の横流しを始めました。これは違法なことですので、昼間は生産隊で働き、夜になってから急いで家を出ました。

夜の明けきらないうちに隣の県の家畜の市場に着くと家畜を選び、すこし安くしてもらって、また来た道を戻ります。身体は疲れ切り、傷つき腫れた足を引きずりながらも、夜が明ける前にこちらの市場まで急ぎました。家畜

は良い値段で売れました。このような行為は危険に満ちたものでした。

しかし、それをしなければ破滅への道です。死に物狂いで捨て身になるほかはありません。危なくても、かすかに成功する望みがあれば、なんとしてもその成功を勝ち得なければなりません。高鳳蓮さんはこの固い信念を持って屈強な男たちと同じように生きるための食料を得たのです。

この過酷な日々、高鳳蓮さんの心の憂さを晴らし、唯一安らぎを得ることが出来たのは剪紙をつくることだったのです。やがて高鳳蓮さん

は自分自身の体験してきたこと、生活の中で感じ取ったものを剪紙に表現するようになってきました。剪紙はその人の身の上の再現です。高鳳蓮さんの剪紙を読み取るにはまず彼女のこれまでの人生を知らなければいけないのです。



剪紙 90年代初期

高鳳蓮さんの信条は「何かをするなら必ず最善をつくす。そうでなければ何もしないのと同じ」ということです。そのとおり、高鳳蓮さんは嫁として母として家の細々とした雑事をこなすかわら、当時の生産大隊で婦女主任、生産大隊長、支部書記長などを歴任し、私利私欲のない働きぶりを高く評価されました。まったく字を知らない高鳳蓮さんですが、よく耳を澄まして人の話を聞き、その思考力は並外れています。農業にもその力が発揮され、いろいろな工夫を重ね、林檎、棗、スイカなどの果物はどこの家よりも大きく、沢山の収穫を得ることが出来るようになりました。「何事も頭を使わなければ無駄になる」とは高鳳蓮さんの言葉です。

嫁して数十年、子供たちは成人し、三人の息子は町へ出て役人となり、三人の娘は良い結婚相手を見つけ、孫も生まれ、経済的にもいくらかゆとりが出来、ようやく精神的に寛いだ時間が持てるようになりました。

*「大躍進政策」と呼ばれ、1958年から1960年まで行われた農工業生産の大増産を目指した政策。しかし、農村の現状を無視した強引な政策と天候不順とが重なり、少なくとも、2,000万にももの飢死者が出たといわれ、大失敗に終わった。このため毛沢東の力は低下し、この権力の回復を目的に文化大革命が起こることとなった。(ウィキペディア百科)



夫の演奏を聞きながら家族揃って剪紙を楽しむ

遠い昔、人間は狩猟をして生活していました。獲物を捕まえると生のままでその肉を食べ、血を飲み、獣や鳥と殆ど同じような生き方でした。

その頃、河南の商丘に燧人氏と言う部落の首領がいました。ある日、森に火事が起こりました。火が消えると森には沢山の、火事で焼かれた獣や鳥などの死骸が残されました。燧人氏がそれを試しに食べてみるととてもいい味がしました。すぐ皆を呼び集めて焼かれた肉を全部美味しく食べました。

その後、人々はまた元のよう生活に戻りましたが、焼いた肉の、その美味しさを忘れることが出来ず、再び火事が起こると願いました。人々がそんな思いを持ち続けていると、ある日、一羽の大きな鳥が現れました。鳥は、燧人氏の前に止まり、次のように言いました。「火を欲しがっているのでしょうか。火は太陽の宮殿にあります。私と一緒に行きましょう」。

燧人氏は鳥の背中に乗ると太陽に向かいました。そして、太陽の宮殿で太陽のお姫様に会いました。お姫様は、「あなたは人間の首領ですから、どうぞ宮殿にあるものは好きなように選んでください」と言いました。燧人氏は「いいえ、私は火だけが欲しいのです」と答えました。するとお姫様は、「よろしい、分かりました。ここには火を生む宝石が一つあります。欲しいのでしたらあげましょう」と宝石を取り出しました。燧人氏はそれを貰うとお礼を述べ人間の世界に戻りました。

燧人氏は貰った宝石をずっと見守って、火が生まれるのを待ちました。しかし、火が生まれて来る様子はなかなか見えません。燧人氏は焦り怒って、「どうしたんだ、だまされたのか、この無用の長物！」と言うとその石を力いっぱい投げつけました。宝石が「ぱちん」と地面の大きな石にぶつくと、綺麗な火

花が四方八方に飛び散りました。「宝石を石に打ち付けると火が出る！」燧人氏は突然さとりしました。

燧人氏は何回も試み、やっと貴重な火の種を得ました。それ以来、人々は石を打ち火を取ることが出

来るようになり、獣や鳥の肉は火を通して食事するようになりました。

燧人氏が人間の世界に火をもたらして、人々の生活はすっかり変わり、人々は燧人氏のことを「火祖」と尊称するようになりました。燧人氏は百歳を過ぎるまで生きていました。そして燧人氏が亡くなっ

た後、人々は感謝の気持ちを込めて大きなお墓を作りました。そのお墓は今でも河南省商丘古城の南西に聳えているということです。



【何媛媛さんと一緒にお料理をしよう!】

3月に、何媛媛さんに花巻(渦巻き風蒸饅頭)や紅焼肉など、中華の知恵がいっぱい詰まった山西家庭料理を教えていただきました。もう一度、何さんとご一緒に中国の家庭料理を作ってみます。

【メニュー】はとても簡単なのにとても美味しかった①花巻や②糖酢白菜の復習、麺種をダイナミックに削って作る③刀削麺や夏向きな④炸醬麵(チヤンメン)の肉味噌、ピーマン、トマト、茄子などの夏野菜を使った⑤紅焼茄子。デザートは‘わんりい’メンバーお気に入りの⑥‘わんりい’特製杏仁豆腐です。

2008年6月29日(日) 9:30 ~ 13:00

於: 麻生市民館・料理室

会費: 1500円(要予約)



*参加は‘わんりい’会員と関係者のみです。食べるだけの人も歓迎します。11:30頃お出掛けください。

●お申込は、お名前と電話番号をFaxかメールで‘わんりい’事務局へお知らせください。

Fax番号: 042-734-5100

E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp



フランスの作曲家ジョルジョ・ビゼー(1838～1875)と言えば「カルメン」が有名ですが、ビゼーが作曲家としての地位を確立したのは24歳の時に発表した「真珠採り(1863年初演)」であることはあまり知られていません。

このオペラでは1860年代のセイロン島北部の漁村が舞台となり、一人の美女と二人の真珠採り漁師が絡んだ悲恋物語です。でも、ビゼーはスリランカを訪れた事はありませんでした。どの様にスリランカをイメージしたのか謎です。たぶん観客もスリランカに行った事のある人は殆どいなかっただろうから、舞台を見てこれがスリランカの雰囲気だと思った事でしょう。ライオンキングを見てアフリカってこういう処だと思うのと同じ事かな。ビゼーはカルメンの舞台のスペインにも行った事がないそうです、想像力の豊かな人だったんでしょうね。今回はこのオペラの内容ではなくて、スリランカの真珠の話を中心にスリランカの産物にまつわる裏話を紹介しようと思います。

現在のスリランカを代表する産物としてスパイス・紅茶・宝石が有名です。紀元前からイスラム諸国によって各種スパイスが独占的に交易されていました。この豊富なスパイスが仇になってヨーロッパ各国から狙われる事になります。スリランカは最初からイギリスの植民地だったと思われていますが、先ず16世紀初めにポルトガルがシナモンの独占交易を画してスリランカを統治下におき、続いてオランダ、その後19世紀初めから1948年までイギリスの統治下にありました。現在でもコロombo中心部にはシナモンガーデンと呼ばれる地域がありますが、その時代の名残です。

紅茶はイギリスの植民地時代に栽培が始められた比較的新しい産物です、当初はインドでは紅茶、スリランカはコーヒーの産地として計画されましたが、コーヒーの苗木を枯らす病害虫が発生した為にインドから代替え品として紅茶の苗木を持ち込み、栽培を始めました。病害虫が発生しなければ今頃は、スリランカはコーヒーの産地となっていて、ウヴァコーヒーとかキャンディコーヒーなんて飲み物が見られたかもしれませんね。

紅茶は現在ではスリランカの代表的な輸出品となって外貨を稼いでいますが問題もあります。紅茶の栽培の為に、19世紀中旬にインドから多数のタミール系労働者がイギリス統治政府によって強制的に移住されました。これらの移住者の処遇が現在でも続いているLTTE(タミールの虎)との民族紛争の一端になっています。紅茶によって富を得る事は出来ましたが、なんとも皮肉な事です。

宝石もスリランカを代表する輸出品です。ダイヤモンドを除くほとんどの宝石が産出されていると言われてます。少し前ですがチャールズ皇太子がダイアナ妃に贈った婚約指輪がスリランカ産のブルーサファイアだった事からスリランカ産ブルーサファイアの評価が高まり値段が高騰したことがありました。

スリランカの人達は宝石で縁起かつぎをします。宝石が直接肌に触れるようにすると幸福を招くと云われています。特にパパラチアというサファイアの変種は持っているだけで最高の幸運に恵まれと云われています。パパラチアは「キング オブ サファイア」又は「インド洋の朝焼け」と呼ばれ、スリランカの人達が大好きな蓮の花の色をしています。スリランカが唯一の産地で極めて産出量が少ない為に幻の宝石と呼ばれています。南部にあるラトゥナプラは宝石の産地として有名な町でラトゥナは宝石、プラは都を意味します。

さて真珠の話をしてしまおう。かつてはスリランカ産の真珠はスパイスや宝石と並んで古来よりイスラム諸国の交易ルートを通じ、20世紀中旬まで世界中に輸出される主要産品でした。主な産地はスリランカ北西部のマルナルからチラウにかけての海岸線で、1940年代まで盛んに真珠採りが行われていました。イギリス植民地時代には北部のジャフナに真珠採取公社が設置されていました。1901年まで在位したヴィクトリア女王の王冠にはスリランカ産の宝石と約300個の真珠が輝いていました。ビゼーの歌曲「真珠採り」は、原作ではメキシコが舞台とされていたが、このような時代背景もあってセイロンに舞台が変わったようです。

ここまで真珠の話は全て過去形で書きましたが理由があります。1940年代を境にスリランカの真珠採りは急激に衰退していきます。この頃から日本の真珠養殖が盛んになり、天然真珠を採っていたスリランカ産では残念ながら勝負にならなかったのです。

最近になってスリランカの新聞でも真珠採りの歴史が紹介され、現地でも再認識される様になりました。世界各国でも天然真珠の不揃いな形や光沢が珍重されるようになり、真珠採りの再開が期待されますが、スリランカでは当分の間は難しいようです。何故かと言うと、上記のスリランカ北部は現在でもLTTEとの戦闘が最も激しく続いている地域だからです。こんなところにもイギリス統治下の負の遺産が影響しているのは、スリランカに関わる人にとって残念なことです。

2006年、母達と別れて一人残った私は、ビザを延長許可を待つ間、四川省の人気観光ポイント「九寨溝」と「黄龍」を訪れた。その帰路、四川大地震震源地に至近の汶川の映秀は旅の忘れられない思い出の場所となった。地震被害の大きさに胸を痛め、「わんりい」には掲載しなかった一人旅・番外編を2回に分けて紹介します。

朝、松藩を出たバスは成都に向かって走りつづけ、最後の小休止の為に街道沿いの休憩所に車を止めた。時計の針は既に4時を回っていた。

休憩所といってもトイレと小さな売店があるだけの場所で、車でしか移動手段の無い山間部の街道脇にはこの手の休憩所があちこちにある。乗客がトイレに行っている間に休憩所の人長いホースで引いた水の水圧とデッキブラシで手早く車の汚れを落す。停車時間はせいぜい20分くらいだろうか

トイレを済ませた私は、その辺をぶらぶらしてバスの発車を待っていた。かなり暑かったこともあり売店のアイスキャンディーに群がる中国人につられ、私も緑豆のアイスに手を伸ばしてみた。甘いものが好きでない私は、この時までアイスなど買った事がなかったのだが、それは予想外に美味しかった。口の中に広がる控えめな緑豆の甘さが旅の疲れを優しく癒してくれる様で心地良かった。私は昨夜の事や朝の一件で今回の小旅行にはかなり満足していたし、楽しかった記憶を反芻しながら満ち足りた気持ちでアイスキャンディーの味を楽しんでいたのだ。とても平和な気持ちだった。

売店の横では小さな屋台に土産物をならべていた。売っている土産物には全く興味が無かったが、バスの乗客である中国人男性が置いてあった石を手に取り、ちょっと眺めてから台にもどすのが私の視界の隅に映った。

あまり人からは理解されないが、私は石が好きなのだ。旅に出た時など土産物は買わなくとも綺麗な石が落ちていっているのを見つけると多少重くとも拾って持ち帰り、それを旅の記念とするのが常であったので、つい土産物屋においてある石とはどんなものかと興味を引かれてしまったのだ。

それは、並べられている土産物の中にコロんと一つだけ置いてあった。取り上げてみてハッとした。握りこぶしを一回り大きくしたくらいの大きさの、川原に落ちているような丸いすべすべしたその石は、表面に白く龍のような模様が浮き出していた。裏返してみても指で摩ってみても、描かれているものではなくて石自体の色がそのような模様を作っているように見えた。

「・・・？」

しかし自然が作った模様にしては、それはあまりにもハッキリと龍だった。土産物として売られている事自体も胡散臭く、石を台に戻してその場を離れようとしたのだが、妙に気になってしまい離れられない。つい、再び取り上げ眺めてはまた戻すという行為を何度も繰り返しているうちに、店員が「欲しいのか？」と訊いてきた。

その時点で私はこれを買おうという気持ちは全く思わなかった。が、念のために聞いておこうというような気持ちで値段を尋ねると20元という返事だ。中国人にとっての価格としてはともかく、日本円にしたら300円程だ。拍子抜けするほど安い金額に思えた。

もし自然の模様で龍が浮き出しているのならそんな金額で売っている訳がない。それよりも、こんな場末の土産物屋で売られている訳がないのだ。そう思う反面、そんな金額で買えるなら、買ってでもいいなという気持ちもチラッと涌いた。

逡巡する私の気持ちを見透かした様に店員が「要る!?! 要る!?!」と声をかけてくる。その瞬間、バスの運転手の「出発するぞ~!!」という呼び声が響いてきた。私は反射的に手に持っていた石を置くと、バスの方に戻っていった。背後からは「要らないの~!?!」と追いかけてくる店員の叫び声が聞こえていたが、それを無視してバスに乗り込み、私が自分の席に座ると直ぐにバスは発車した。

その瞬間から私は後悔し始めていた・・・・・・・・。

たった20元程度なら買っても良かったんじゃないの~?

だってあんなくだらないみやげ物なんて・・・

もしかしたら店の店員がどこかの川原で拾ってきて、面白いから並べていたのかも?

さっきまでの平和な気持ちは一気に消し飛んでしまった。

今更、あの石が欲しくて堪らない気持ちになってしまったのだ。もう石が本物だろうと偽物だろうとかまわさない気持ちだった。ここで降ろしてくれ~!! と叫びたいほどの後悔がこみ上げてきたが、どうしようも無い。

諦めるしかなかった。・・・が、諦められない気持ちがムクムクと湧き上がってきてしまったのだ。こうなってしまうと私は自分でも自分の気持ちがコントロールできなくなってしまう。『もう一度ここにあの石を買いにこようか』という馬鹿げた思いつきが心をかすめると、その思いを打ち消す事ができなくなってしまった。

そう思った瞬間から私はバスの外の風景を必死に見つめ、あたりの景色を記憶に留めようとし始めた。左側の車窓には岷江のどんよりと濁った川面が見えていた。

ちょうど、隣の席に座っていたお兄さんの膝のうえに四川省の交通地図が乗っていたので見せてもらい「今どこですか?」と尋ねると、「今はこの辺だよ」と指し示してくれた地図上には『汶川』という地名が記されていた。

さっきまでの爽やかな気持ちとは裏腹に、悶々とした

気持ちをかかえた私を乗せてバスは成都に戻ってきた。時計をみると7時だった。

バスターミナルから出る前に、チケット売り場に立ち寄ってバスの行き先の地名に汶川という名があるのを確認した。チケット代は34元だ。20元の石を片道34元のバス代を払って買いに行くなんて、どう考えても馬鹿げている。とにかく今日一日ゆっくり休んで、明日の朝、気が変わってなかったら行くことにした……。

自分の気が変わる事を願いながら眠りについた私は、翌朝目覚めると、まったく気持ちが変わっていない事を再確認し、旅の疲れも癒えぬままに再び長距離バスターミナルに向かった。

汶川までのチケットをかうとバスに乗り込む。つくづく自分はバカだなと思うが、こんな酔狂な事をワザワザできる人間はそうもまいと思つと愉快的な気もした。

あんな街道沿いに無数にある休憩所が見つけれられる確証も無かったが、それがかえって宝探しに行くようなワクワク感を感じさせていた。手がかりは、汶川という場所の近くである事。岷江沿いの道であった事。昨日の成都到着時刻から考えると時間的にみて2時間半から3時間くらい走った場所の距離にある筈だという事だ。

目当ての休憩所が見つけれられたところで、私の乗っているバスがそこに停車しない限り、どうやってそこまで行けばよいのかも迷うところだった。一応の計画としてはとりあえず汶川まで行く。長距離バスが停車するような場所なら、タクシーかミニバスくらいはあるだろうから、汶川からそれに乗って休憩所まで行き、帰りはその休憩所に停車した成都行きのバスに途中乗車して帰る、という感じだった。

走り始めてからおよそ2時間が経過した。そろそろ現場に近づいている筈だ。

バスはどんよりと陰気な川面を光らせる岷江に沿うようにはしる街道に入っていた。中国のドライバーは道さえ空いていればカーブの連続する崖道だろうとお構い無しにかなりのスピードで飛ばしていくので、風景は一瞬にして後方に流れ去ってしまう。勝負は一瞬だ。

車窓の風景が昨日私が必死に見つめていた風景と重なるようになってきた。目を皿のようにして、街道沿いの休憩所を一つ一つ確認していると、見覚のあるトイレの建物が見え、売店の脇にはお土産をならべた屋台の姿が、一瞬窓の外を流れていった。

「ああ～!! 見つけた～! 見つけた～!! なんだ結構簡単に見つかったじゃん!!」

喜びもつかの間、目あての休憩所はどんどん後ろへと遠ざかっていく。

またしても「ここで降ろして～!」と叫びたい気持ちだったが、躊躇している間に通り過ぎてからずいぶん走ってしまった。仕方がない。とにかく汶川まで行ってから作戦を考えよう。もう、そう遠くはない筈だ。

一人ヤキモキする私を乗せて、バスはそこから15分ほど走ったところで別の休憩所に停車した。あれれ?

汶川が近いのならば、ここで休憩所に停まる訳がない。

「汶川にはまだ着かないの?」

上半身裸になって、タバコをふかしていた運転手に尋ねると、彼は首を横に振った。

「まだ、だいぶある」

ええ～!? そんな筈じゃ…そうか、あのお兄さんの持っていた地図は縮尺が大きいものだったんだ～! 今頃そんな事に気がつくなんて～!

「じゃ、この辺にタクシーはありませんか? 私は降りたい場所を通り過ぎてしまったの。」

「こんなところにタクシーなんて無いよ。」

「じゃあ、反対方向に戻るバスに乗り換えたいんだけど」

「この辺でバスに乗れるところなんて無いさ。とにかく汶川まで行くんだな。そこで帰りのバスの切符を買いな。もう出発するぞ」

目的の場所を見つけてしまったからにはこれ以上前に進むのは嫌だったが、街からも遠く離れた何もない場所の道に一人途中下車する気にはなれなかった。仕方なくもう一度バスの座席に戻って、ひたすら汶川に到着するのを待った。

汶川にはなかなか着かなかった。バスは相変わらずどんよりと流れる岷江に沿った埃っぽいガタガタ道をいつまでも走り続け、灰色にくすんだような風景は眺めても少しも楽しくなかった。不安が怒りに変わり、怒りが諦めになる頃やっと街並みの中に入り汶川に到着したのはなんと、あの休憩所を見つけた地点から3時間も走ってからだった。

さすがにグツタリだが、すぐにチケットを買い直して成都方面にトンボ帰りである。帰り道では少し気持ちに余裕ができたため、車窓を過ぎる村や街があると建物の看板を見つめて、その土地の名前を探し、手持ちの交通地図と照らし合わせて見た。今までつまらなく思えた道もこうして見ると少しは親しみが湧いてくる。旅行者には見向きもされないローカルな街の名前を知る事によって、自分と四川省の距離が縮まるような気がした。

もと来た道を再び三時間走り、往路で休憩をとった場所の近くまで戻ってきた。そのあたりの地名は『映秀』というらしかった。

そこから約15分、やっとの思いで戻った目的の休憩所は既に店仕舞いしていた。朝から6時間かけて汶川まで行き、3時間かけてここまで戻ったのだ。時刻は既に夕方6時を回っている。今日は一日中意味もなくバスに乗ってただけで終わってしまった。今のところ勝負は完全に私の負けだ。

このままじゃ引き下がれない。明日もう一度出直してやる!

私はこの馬鹿げた宝探しに完全にムキになっていた。

(7月号に続く)

2007年9月、前年に開通したばかりの青蔵鉄道「天空列車」乗車とラ薩(ラサ)観光をした。

小学生時代鉄道オタクだった私は、「天空列車」には是非乗りたいという思いがあった。更に四姑娘山で撮った高山植物の名前を調べていたとき、キク科の植物に'Syncalathium kawagutii'という学名があるのを知った。20世紀初頭にチベットへ渡った僧「河口慧海」が、仏典とともに持ち帰った植物標本の中に新種が見つかり、彼に由来して命名したとあった。河口慧海なる人物を知らなかったが、調べると「チベット旅行記」を書いている。山岳地帯の道なき道を、苦勞を重ねてやっとラサに辿り着く様や、ラサ滞在中のさまざまなことが書かれておりチベットに大いに興味を持ち今回の旅となった。



▶ **旅の行程** 8月31日 成田発⇒成都1泊⇒林芝(ニンティ)2泊⇒420kmの川蔵公路をバス移動⇒ラサ4泊⇒青蔵鉄道(車中泊)⇒西寧1泊⇒9月9日成田着(9泊10日)。

● **林芝**: 海拔3,000m。高所順化を兼ねてチベットの旅のスタート地点に選ぶ。林芝の中心地は八一鎮。中華人民共和国建国日「1949年8月1日」

に因んでつけられた。落差300mのカデン瀑布。世界で15番目に高いというナムチャパルワ山(7,782m)を4,700mのセチラ峠を越えて見に行くが生憎雲の中。聞けば年間50日ぐらしか見えないという。この峠でタルチョ^{注1)}の歓迎をうける。

次いで、世界柏樹王園林。樹齢2,600年、樹高58mの柏樹。柏と書いても、柏餅の柏でなく、中国では、ヒノキ科の樹木に柏の字を当てる。

▶ **川蔵公路を走る**: 四川省・成都と西藏・ラサを結ぶ(カト



マンズまで通じている国道318線)ことからこう呼ばれる。途中、チベット4大聖湖の一つパソン・ツォ(3,464m)に寄る(ツォはチベット語で湖)。緑がかったコバルトブルーの湖面が美しい。また、元の川蔵公路に戻る。車窓に展開する雄大な山岳風景を楽しみながらドライブ。前方に黒い人影を発見。五体投地^{注2)}している一行に出会う。

ラサまでまだ200kmはあろうかという地点である。あと何日かかるだろうか。快く写真撮影に応じてくれた。

バスは急坂にかかり、高度をぐんぐん上げてゆく。腕の高度計は4,000mを越え、16:15、4,500m。16:25、4,900m。16:30、5,013mのミラ峠到着である。腕の気圧計は525ヘクトパスカル、平地の約半分である。ここでもタルチョの歓迎を受ける。タルチョの先には4千数百メートルの山並みが眼下に広がる。

ついに5,000mを超えたか、しばし感動の余韻に浸る。誰一人、頭痛等高山病の症状を訴える者なし。二時間後ラサに到着。

▶ ラサを観光する

● **ポタラ宮**: 7世紀、吐蕃王国(吐蕃はチベットの古称)ソンツェン・ガンボ王が中国・

唐から皇后に迎えた文成公主^{注3)}のために造ったのが始まりという。その後、14世紀にツォンカバがチベット仏教ゲルク派を起こした。彼の弟子がダライ・ラマ1世となり、後継者(活仏)をダライラマと名乗るようになった。

17世紀、ダライ・ラマ5世に至り、チベットの宗教、政治の中心地となる。このとき、ほぼ現在の建物になったという。ポタラ宮は外観、赤いところ(赤宮)と白いところ(白宮)があるが、赤宮は宗教的な場所、白宮は政治的な場所として使わ





ミラ峠 4千数百メートルの山並みが眼下に広がる



ラサのシンボル・ポタラ宮

れた。現在は中国政府の管理下に置かれ、チベット仏教(大乘仏教)の本尊・観音菩薩像をはじめ、釈迦牟尼像、ソンツェン・ガンボ王・文成公主像、ツォンカバ像、歴代ダライ・ラマの像・墓が安置してある。5世は絶大な権力を持っていたというが、彼の墓には金がなんと3,721 kg使われているという。

❁ **ノル布林カ**：夏の離宮。夏季、ダライラマはここで執務する。ダライラマ14世の執務した部屋も保存されていた。

❁ **デブン寺**：ゲルク派寺院。本拠をポタラ宮に移すまで、ダライ・ラマがここで執務した。一時、8,000人の修業僧がいたという。厨房には、五右衛門が五人は入ろうかという大釜があった。参道のマニ車、裏山の巨石に描かれた仏画、大タンガ(布に描かれた仏画)が有名。

❁ **ジョカン寺**：チベット仏教ゲルク派の総本山。文成公主が持ってきた釈迦牟尼像が安置してある。五体投地巡礼はこの寺を目指して行われる。門前では、大勢の人が五体投地して、お参りをしていた。また、ジョカン寺を取り巻くバルコル(八角街)はラサの繁華街として有名であるが、本来は、信者が五体投地やマニ車を回しながら巡礼する参道。

❁ **セラ寺**：河口慧海がチベット滞在中、投宿した寺。慧海が使っていた部屋が保存されているという。パチン・パンパンと音がする。音のする方に行ってみると、土堀に囲まれた疎林があり、その中に150名ほどの僧侶が、三々五々車座になっていた。一人の僧侶が立っており、音はその僧侶から発していた。これが慧海もしたという「問答修業」。立った僧が質問をし、座っている僧が答える。例の音は、この質問をするときの所作から出ている。「さあ、解るか、答えてみよ」と言ってるか

のよう。近くを黄色い帽子をもった僧が通る。お願いして、かぶって貰う。ゲルク派は別名黄帽派ともいう。

何処も同じ、仏の沙汰も金次第。ポタラ宮100元。ノル布林カ60元。ジョカン寺70元。デブン寺50元。セラ寺50元。(1元≒17円)

▶ **ヤムドク・ツォ観光** 樹高十数メートルの並木、川幅1kmはあろうかという川沿いを快適ドライブ。4,000mを越えた辺り、車窓下に住居跡?、畑の跡? 古代遺跡? の台地が二箇所ほど見える。なおも、九十九折れの道をひた走り、遠くに雪山を見ながら高度を稼ぐ。4,750mのカンパラ峠到着。100mも進むと、眼下に“あっ”と息を呑むトルコ・ブルーに輝く湖面が目飛び込んできた。チベット四大聖湖の一つ、ヤムドク・ツォだ。)湖面の高さは4,441m。慧海もラサに入る前、この湖を見おり、「豪壮なる光景に無限の情緒を喚起されました」とその旅行記に書いている。

注

- 1) **タルチョ**：山・峠・橋・寺などに掲げられている5色(青・白・赤・緑・黄)の旗で、お経や旅の安全・健康・富への願いが書いてある。そのはためきは風によって、仏の教えを世の中に広めるといふ。
- 2) **五体投地**：チベット仏教の聖地巡礼で行われる祈りの方法。仏に対して最も神聖な祈り(仏の足下に額をつける)という。頭上・顔の前・胸で手を合わせた後に、全体を大地に投げ出すように伏す。
- 3) **文成公主**：唐王朝2代皇帝太宗の公女(養女)。641年吐蕃王に降嫁する。このとき、仏像や仏典など多くの物を持って行ったという。これがチベット仏教の始まり(それまでは民族宗教・ボン教)。文成公主はチベットの人々に尽くし、一方、人々から愛され、観音菩薩の化身と崇められたという。



デブン寺参道のマニ車



セラ寺の問答修行の様子

▶ 長い冬が終わり、暖かな春を迎えて

北京で春節を過ごし、その後太原、平遥、寧波、紹興、上海を訪れた後、2月27日に大連に戻って来た。すぐ新学期が始まる。3月1日からスタートである。ただ9月が本来の新学期である。そのためか日本のような始業式とか入学式というものではなく、すぐ当日から授業開始である。

私は昨年と同じクラスと新入生の1クラスの授業担当で、前者は前にやってきたところから続けて教えるだけなので、楽といえば楽である。後者も昨年9月から教えてきたことの繰り返して、多少形を変えたり、工夫を加えながら教えることとし、こちらも難しいことは何もないと言ってもいいだろう。

3・4月とも特別変わったこともなく、授業を進めた。あつという間の2ヶ月であった。私の任期もあと2ヶ月をきる日数となってきた。だんだん残り少なくなってくると、急にやり残したことはないだろうかとか、あそこにまだ行ってないので行ってみたいとか、いろいろなことが浮かんでくる。

今までは寒い日が多かったので、外出もままならなかった。しかし、5月ともなれば暖かな日が多くなるので、土日には近くの山などに行ってみたいと思うようになり、先日学生と一緒に山に登ってみた。山といってもそんな高い山ではなく、せいぜい1時間もあれば登れる山である。

また5月下旬には大連の「アカシヤ祭り」がおこなわれるので、ぜひ見てみたいと考えている。

ここでは4月下旬まではまだ寒い日が多く、多少日中暖かな日もあったが、本格的な春の到来は5月まで待たなければならなかった。

4月中旬大連の街を歩いていて、さくらの花に似た木があるのに気がついた。色といい形といい、そっくりなので、桜だと思ったが確信をもつことが出来なかった。しかし、地元の日本人向けの雑誌(『Look 大連』)に「大連お花見特集」という記事が出ていて、それを見ると大連には桜の名所があり、それらのいくつかが紹介されていた。毎年多くの人がお花見に出かけるという。やはり私が見たのも桜に間違いなかった。それからというもの気をつけて見ていると、あちこちに咲いているのに気がついた。上記の情報誌によると、大連の桜の名所は、

- ①中日友好桜花園(開発区砲台山公園)
- ②ソフトウェアパーク「桜の園」
- ③竜王塘水庫桜花園
- ④白雲山登山道
- ⑤大連理工大学

といった具合に何箇所もある。しかし、残念ながら今年

は見に行くことは出来なかった。とって来年見に来られるわけではないが。

5月になると、1日から4日までは連休が続いた。1日の労働節と土・日を含めて4日間の連休であるが、昨年までは1週間の休みであった。今年から急に短くなり、3日間少なくなった。これまで文字通り1週間休みのゴールデン・ウィーク(黄金周)であったが、政府の考えで今年から変更になったそうである。1週間あればどこか遠くへ旅行に行くことも可能であったのに、大変残念であった。

遠出は無理なので、近くでどこかに出かけたいと1ヶ月前あたりから考えはじめた。まず思い浮かんだのが、北朝鮮と国境を接する丹東市へ行くことであった。中国人同僚にこの丹東出身の劉先生がいたので、彼に話すと一緒に行ってくれることとなり、彼以外にもう一人の日本人教師の澤田友二先生と福建省アモイ近くで日本語を教えている山口イツさんも参加することとなり、合計4人で行くことになった。

5月1日、私はアモイから来られる山口氏を迎えに大連周水子国際空港へ行き、彼女を連れて丹東へ行き、そこで他の2人と落ち合うことにした。

山口氏は、町田市にお住まいで、「わんりい」の中国語勉強会に参加されていたが、昨年9月から日本語教師として、中国に来ている。

4月始めに大連へ来たいという彼女の希望があったが、すでに丹東に行く予定であったので、「丹東に行きませんか」とお誘いしたところ、「行ってみたい」との返事だったので、このような形になった。

大連から丹東までバスで4時間ほどかかった。劉先生がすでに予約してあった桜花大酒店で落ち合うことができ、チェックイン後、4人で近くの食堂で夕飯をとった。

翌日はまず丹東の南端を流れる鴨緑江を見に出かけた。ここはもう北朝鮮と国境を接するところで、川を隔てて真近に北朝鮮を見ることが出来る。川には2本橋が架かっていて、1本は「中朝友誼橋」(元は鴨緑江第二橋梁といい、満州国時代に作られ、その後鴨緑江大橋と変わり、さらに現在の名前に変わる)という名前で、直接北朝鮮の新義州市に行くことが出来る。

橋には鉄道と道路が走っている。しかし、鉄道も道路も一方通行のため時間を決めて、通行出来るようになっている。もう1本は「鴨緑江断橋」(元々は鴨緑江橋梁という名であった)という名前で、橋が途中で途切れてしまっている。これは朝鮮戦争当時、中国が北朝鮮を援護したことから、アメリカ軍の攻撃を受けた。物資を輸送する重要な鉄橋であったため1950年破壊されてしまった。その後復旧

することなく、途切れたままの形で残っている。

もちろん2本ともアメリカ軍によって破壊されたが、その後鴨緑江大橋は復旧して、現在の中朝友誼橋となり、鴨緑江橋梁は復旧されることなく鴨緑江断橋となった。

鴨緑江断橋を多くの観光客と共に渡ってみた。川の途中までしか行けませんが、すぐ近くに北朝鮮を見ることが出来、いままで国境というものを身近に感じたことがなかったので、なんだか奇妙な感じであった。

丹東側は大きなビルがたくさん建ち、観光客があふれているのに、北朝鮮側を見ると人影もなく建物もみすぼらしいものはいくつか建っているだけで、あまりにもそのコントラストに驚いてしまった。夜になると、丹東の街はネオンサインが輝き、橋には明かりがともし、またライトアップされているのに、かの地は黒い闇に覆われているだけであった。

翌日は虎山長城へ出かけた。ここは万里の長城の東の端で、建造は1469年(明の成化5年)である。1992年に修復が始まり、現在では700mが完成した。修復された長城には7つの敵楼と戦台があり、高さは6m、幅は底部で5m、頂部で4mとなっている。この長城を踏破するには1時間以上かかるが、かなり高低がきついので、もっと時間はかかるかもしれない。

だんだん登って行くうちに、遠くに北朝鮮が見えてくる。昨日見た風景とは異なり、ここから見える北朝鮮は畑や山

林が広がるのどかな農村地帯である。長城を出て戻る際、すぐ近くに国境線が見え、鉄条網線で区切られている。そこまで歩いて行って、鉄条網線の内側に入ることが出来る。そこは両国の緩衝地帯である。皆でそこまで歩いてみた。近くには農作業をする北朝鮮の人や歩いている人の姿が見えた。こんな近くまで北朝鮮側へ近づけるのには驚きであった。

3日の最終日は「抗美援朝紀念館」で出かけた。ここは朝鮮戦争の時に、中国が北朝鮮を助けて、韓国とアメリカと戦ったことを記念するもので、当時の資料や実際に使われた兵器などが多数展示されていた。あまりこの戦争については知らなかったもので、おおいに勉強になったと言ってもいいだろう。

3日間の短い丹東訪問であったが、今回は中国と北朝鮮との関係や国境というものを考えさせる旅行であった。出来ればもう一度来てみたと思う。そして、もっと国境沿いの他の都市をも見てみたいと考えている。

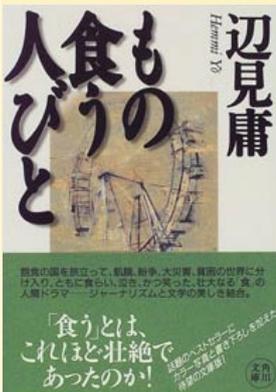
使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。日本の切手、外国の切手など、周りを1cmほど残して切り取り、おついでに折に「わりい」の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

中国を読む(52)

「もの食う人々」 辺見庸 著

(角川文庫)



1990年代前半、飽食時代に一抹の不安を覚え、著者は「もの食う」旅に出る。食すことは本来、とても楽しい営みならず。けれど、ここに出てくる食事は、じんわりとした苦さを味あわせる。世界のどこかで起きている苦しみを、この本は味覚で訴えかけてくるのだ。だから他人の苦しみが、

自分の中へ入ってくる。喉元通って忘れたい。

著者は何度か彼自身の臓器を「日本製の、懦弱な私の舌と胃袋」と自嘲気味に表現する。胃袋がノウノウとしていられる国はごく一握りで、残りあまたの国や土地では死と隣り合わせの食が普通に存在する。横流しが横行し餓死者が出た軍隊で、兵隊たちがすすったであろう水のようなスープ。宗教戦争が激しい某国の修道院で食べる虚しい精進料理。栄養失調で死につつある少女が床につく国では、国連平和維持活動の名のもと先進国の軍隊が牛肉を食べている。

生命をつなぐはずの食べ物。その日を生きていくために、命をすり減らす食事もある。エイズが蔓延する町で、感染している母親から母乳を飲む赤ちゃん。母乳の他にあげるものがない。残酷なのは母親ではなく、現実なのだ。チェルノブイリ原発からそう遠くないところに住む人々は、放射能に汚染された魚やキノコ、リンゴを食べている。「ほかになにを食べばいいんだ、ほかに!」と、放射能を心配する著者へ野次が飛ぶ。放射能の影響で体のあちこちが痛んでも、彼らは生きるために死の食物を食べるしかない。

「飽食の時代が、あたかもそのつけが回ってくるように、空腹の時代に転じるのは、そう果てしなく遠い先のことでもないのではないか。」「もの食う」旅を終えての、著者の実感がコトリと落ちてくる。中国製ギョーザ中毒事件を機に、日本では国産しか買ってはいけない雰囲気が強くなっている。

安心・安全な食べ物が並ぶことが当然と考えている私たち。けれど、安心・安全なものを毎日食べられるのは、奇跡と言っても過言ではないほど恵まれていること、だったりする。

(真中智子)

Hakuju Hall シリーズ

中国の楽器・その音の広がり (7)

笛子と笙 / 伝統と現代

http://lasa-kikaku.cside.com/music/hakujuhall/log_2006.html

2008年6月22日(日) 14:00開演(13:30開場)

於: HAKUJU HALL

小田急線「代々木八幡」、東京メトロ千代田線「代々木公園」駅徒歩5分

出演: 王明君(笛子・簫)・銭騰浩(笙)・何晶(琵琶)
及川夕美(ピアノ) 友情出演: 姜小青(古箏)

予定曲目: 春山採茶 伝統曲 粧台秋思 鳳凰展翅など

¥5,000(前売り) ¥5,500(当日) 全席指定

●'わんりい'の会員と関係者は、前売り5,000円のところ
2割引の4,000円になります。

*名前、住所、電話番号と枚数を書いて'わんりい'事務局
へFax又はE-mailでお申込みください。
6月10日以降に確認の電話をします。

Fax 番号: 042-734-5100

E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp

●主催: ラサ企画 TEL/FAX: 03-5748-3040

xiānggǎng zhī yè

香港之夜

詞: 林煌坤

曲: 井上忠夫

yèmù dī chuí hóngdēng lǜdēng

夜幕底垂红灯绿灯

ní hóng duō yàoyǎn

霓虹多耀眼

nà zhōnglóu qīngqīng huíxiǎng

那钟楼轻轻回响

yíngjiē hǎo yèwǎn

迎接好夜晚

bìfēngtáng duō fēngguāng

避风塘多风光

diǎndiǎn yúhuǒ jiào rén táo zuì

点点渔火叫人陶醉

zài nà měilì yèwǎn

在那美丽夜晚

nà xiāng ài rén ér bàn chéng shuāng

那相爱人儿伴成双

tāmen pāishǒu lā qíng huà shuō bù wán

他们拍手拉情话说不完

qīng qīng wǒ wǒ qíng yì miǎn miǎn

卿卿我我情意绵绵

xiě yī shǒu ài de shī piān

写一首爱的诗篇

HONG GONG HONG GONG

和你在一起 HONG GONG HONG GONG

wǒ ài zhè ge měilì wǎn shàng

我爱这个美丽晚上

yǒu nǐ zài wǒ shēn páng

有你在身旁

【6月の定例会&おたより発送予定日】

- 定例会: 6月17日(火) 13:30 ~ 田井宅
- おたより発送: 6月29日(日) 14:30 ~ 麻生市民館料理室

お誘い合わせてご参加を!!

四川大地震・チャリティコンサート
四川の復興を祈る、中国民族音楽の夕べ

日本で活躍の、中国民族音楽の精鋭たちと'わんりい'の共同で開催し、収益金は全て四川大地震の義援金として贈ります。

2008年7月24日(木) 19:00 ~

於: 町田市民フォーラム・3Fホール(188席)

出演: 銭騰浩(笙) 姜小青(古箏) 馬平(打楽器)
趙鳳英(歌)

参加費: 2,500円

*名前、住所、電話番号と枚数を書いて'わんりい'事務局
へFax又はE-mailでお申込みください。

6月10日以降に確認の電話をします。

Fax 番号: 042-734-5100 'わんりい'

E-mail: wanli@jcom.home.ne.jp

主催: 'わんりい'

〈いっぶくの情景〉嗜好文化探訪の旅

大村次郷ユーラシア写真図鑑

於: たばこと塩の博物館

<http://www.jti.co.jp/Culture/museum/WelcomeJ.html>

渋谷区神南 1-16-8 TEL.03-3476-2041

2008年5月17日(土) ~ 7月6日(日)(月曜休館)

10:00から18:00(入場は17:30まで)

NHK放映の「シルクロード」「大黄河」「四大文明」「文明の道」「新シルクロード」などのスチール写真担当の、大村次郷氏がイエメン、トルコ、イラン、ウズベキスタン、パキスタン、インド、スリランカ、バングラデシュ、中国、台湾など10ヶ国の民族と風土、生活の有様を紹介。

展示関連講演会(14:00 ~ 於: 1F・視聴覚ホール)

- ▶ 6月15日(日)『ユーラシアの嗜好文化を巡る旅』
河邑厚徳(NHKエデュケーショナル・エグゼクティブ・プロデューサー)
大村次郷(写真家)
- ▶ 6月21日(土)『新シルクロード取材と〈大村次郷の眼〉』
井上隆史(アジア・コンテンツセンター取締役)
大村次郷(写真家)
- ▶ 6月22日(日)『街角から見たウズベキスタンの過去と現在』
加藤九祚(国立民族学博物館名誉教授)
西岡圭司(『季刊民族学』編集長)・大村次郷(写真家)
- ▶ 7月6日(日)『嗜好品の人類史的意味』
松原正毅(国立民族学博物館名誉教授)
※当日先着80名。参加費無料(入館料は必要です)。

イベント(要申込み)(14:00 ~ 於: 1F・視聴覚ホール)

- ▶ 6月29日(日)「中国茶と中国音楽を楽しむ」
亀岡紀子(中国茶文化研究家)・張林(揚琴演奏家)
- ◎ 募集人員: 50名(応募多数の場合は抽選とします)
- ◎ 参加費: 1000円(当日会場入口で徴収します)
- ◎ 申し込み: 往復はがきに住所、氏名、年齢、返信用住所氏名を明記の上、
たばこと塩の博物館「中国茶と中国音楽を楽しむ」係宛 お送りください。
- ◎ 締め切り: 2008年6月11日(水) ※当日必着

◆何媛媛さんとの料理交流会をします。詳細案内は9ページをご覧ください。